祠を祀り、三の丸西北の隅には八幡宮を勧請した。また城の東部一角に康寧山宝寿禅寺を建立した。これは康安二年（北朝で一三六二）の鐘名に次のようにあるのでわかる。

奥州会津大会津下荒井
康寧山宝寿禅寺　洪鐘一口
檀　那　左金吾　盛　久
住　持　　恵　静
大　工　　景　広
康安二年壬寅仲呂　　日

ここに左金吾とあるのは左ェ門尉の意、康安二年は正平十七年に当る。仲呂は四月の意、この鐘は慶長十六年（一六一一）の大地震に寺が倒壊したので、小田山麓の恵倫寺に移した。

その後応安元年（一三六八）富田氏五代の祺祐が盛んな塔供養を営み、康暦元年（一三七九）には五重の塔を建立したと伝えている。今でもその五重の塔跡という字名に、塔の内、塔の下などが残っている。

同じ康暦元年に、富田四代宗祐の弟祐之の子仁範が蓮華寺を建立している。相当大規模な築城で、やはり古くから、中州の開拓の要衝を占めていたと思われる。

3、若松城の構築と城下町の形成　北会津村の直接の開発史ではないから略記にとどめるが、会津藩領としてその治下にあったのであるから、会津若松市に鶴が城、これにはいろいろの名称があって、文部省が文化財保護委員会で史跡に指定する時は若松城とした。建久三年（一一九二）葦名氏の祖佐原義連が最初に来封した頃は、勿論居城もわからないし、義連が会津に果して来ていたのかどうかもはっきりしていない。その墓地というのが